

人間科学研究所通信

Newsletter of the Institute of Human Sciences
Musashino University

第12号

目次

Contents

- 第8回武蔵野言語聴覚カンファレンスによせて———2
- ショートレクチャー 聞こえと関係性の発達———2
- 特別企画
 - ・カリフォルニア州の小児聴覚学におけるチームワーク———2、3
 - ・母校にて———3
 - ・司会記———3
- 様々な「ご縁」に支えられて———3



2023年3月18日（土）、武蔵野大学武蔵野キャンパス9号館において、人間社会研究科人間学専攻言語聴覚コースならびに専攻科（言語聴覚士養成課程）主催の第8回武蔵野言語聴覚カンファレンスが開催されました。学内外から170名余の参加があり、大学院生らによる研究報告が4演題、本学専攻科長北義子准教授によるショートレクチャー「聞こえと関係性の発達」、特別講演では「カリフォルニア州の小児聴覚学におけるチームワーク」と題してカリフォルニアよりお二人の研究者を招へいし、大変有意義なカンファレンスとなりました。

世界の幸せをカタチにする。

Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University

武蔵野大学

● 第8回 武蔵野言語聴覚カンファレンスによせて

武蔵野大学大学院人間社会研究科人間学専攻言語聴覚コース / 専攻科（言語聴覚士養成課程） 専攻科長 **北 義子**

武蔵野言語聴覚カンファレンスは、平成26年に武蔵野大学大学院人間社会研究科人間学専攻言語聴覚コースならびに専攻科言語聴覚士養成課程がこの武蔵野キャンパスに開設され、その年度末に1周年記念シンポジウムが開催されたことをと口に今年で9年目を迎えます。当コースからの発信を学外に、そして、卒業生に届けようという試みは年に一度ではありますが、確実な私たちの歩みとしてその足跡を残してまいりました。

コロナ禍により、令和2年の第5回は中止のやむなきに至り、令和3年はオンライン形式による第5・6回の合併開催、昨年（令和4年）もオンラインによる開催となりました。やっとコロナ禍も落ち着きを見せ、今回第8回武蔵野言語聴覚カンファレンスでは、オンラインと会場参加の方がたをお繋ぎするハイブリッド形式で開催いたしました。第一部は大学院生らによる研究報告、第二部は「きこえと関係性の発達について」と題してショートレクチャーを、第三部には特別講演を企画いたしました。

特別講演には、国際医療福祉大学大学院の城間将江先生に司会の労をお取りいただき、カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校聴覚平衡センターのマーガレット・ウィンター先生より、「カリフォルニアの小児聴覚領域のチームワーク」というテーマでお話を伺いました。英語でご講演中は日本語による翻訳の字幕が、そして、日本語で話されるときは日本語の字幕がオープンキャプションで投影されました。お話の中で、アメリカと日本の制度の違いなど、理解しにくい点については、昨年より引き続きご登壇頂きました久木身利先生（同大学准教授）が随時補足してお話くださいましたので、大変貴重な時間となりました。また、オーディオロジストとスピーチパソロジストに分かれているアメリカ、二つの資格の領域が言語聴覚士という資格でカバーされている日本との状況の違いなどについて

でも考えさせられる大変刺激的なご講演となりました。紙面の制約により、第一部の内容は割愛いたしました。こちらも食事中の背景音楽の効果や、難聴者の聴覚認識について、方向感覚について、中学校におけるオープンキャプションについて、と第2部、第3部につながる内容で、「きこえ」と「音楽性」が通奏低音のように響く一日となりました。

参加者は170人を超え、卒業生はもとより、学外者からのアクセスも多く、反響の大きさに驚くとともに、ハイブリッドの良さも実感できました。

ご登壇くださいましたウィンター先生、久木先生、城間先生、ハイブリッド配信をお手伝いくださった武蔵野大学アントレプレナーシップ学部西館様、事務の方々、協賛くださったオチコン社様、杉崎様、武蔵野中高の箏曲部のみなさん、そしてお茶室の掃除から嬉々として手伝ってくださった在学生のみなさん、私を四方から支えてくださった専任教員の皆様、本当に有難うございました。皆の力が合わさってこそ成功でした。すべての皆様に感謝申し上げます。

武蔵野大学における言語聴覚士の養成は、小嶋知幸教授が開設して下さって以来、来年度は10年の節目の年を迎えます。人間学の上に言語聴覚療法を位置づけた武蔵野の学びは、着実にこの領域に新しい息吹を送り続けてきました。そして、このアニュアルカンファレンスはこれから果立った言語聴覚士、そして、さらに学びを求める学外の言語聴覚士に向けて、新たな知見を発信し、響きあう仲間を増やす場でもあります。今年出会った方々、来年もまた、この武蔵野言語聴覚カンファレンスでお会いいたしましょう。さらにまた多くの方と出会えます事を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

● ショートレクチャー「聞こえと関係性の発達」

新生児聴覚スクリーニングにより、軽度難聴児が超早期に発見されるようになり、対面での声は聞こえているから、補聴器装用は見合わせたい、などと相談を受けることがある。人工内耳をすすめられたが、ゆっくり考えたい、という声もある。たしかにあかちゃんは1歳になるまで話めせず、また軽度難聴の場合は大きな声で呼べば振り向くことができる。しかし、生後1年の間に聞こえることによってさまざまな能力を発達させてゆくと考えられる。その能力の一つが関係性である。

聞こえの機能は、生活の様々な音から、はかりしれない恩恵をもたらす。聞こえの機能には、常時働いている警報的機能と注意を焦点化し、維持し続ける機能があり、他者との注意の立ち上げ、空間の共有、時間の共有に貢献している。私達が他者と情動・経験が共有でき、経験を人との関係性のなかで意味付けすることができるのはこのためである。とくに、警報的な機能については、意識して機能させることがないため、その働きを意識することは難しい。

会話コミュニケーションでことばが交わされるとき、私達は「ことば」を「テキスト」としてのみ意識しがちであるが、ことばには「テクスチャー」があり、ことばがどのような声のニュアンスで話されたのか、ため息まじりなのか、大きく明るくのか等のパラ言語情報は、声に隠された意味（緊張、リラックス、ジョーク、皮肉など）を私達に伝えてくる。また、その言葉のコンテクスト（背景・文脈）もテキストとテクスチャーを解釈するために必要な情報である。

ことばの発達を考えると、子どもは「教えられる」育つのではなく「ケアされて、自ら、意味づけて」育つといわれ、「子どものニーズに応じた敏感で応答的な養育の関係性は決定的に重要（世界乳幼児精神保健学会）」と言われる。敏感に応答的にケアされる（世

話される・慰められる）ことによって子どもは愛着（アタッチメント）システムを発達させ、他者との関係性を育む。聴児の生後半年間のコミュニケーションの発達を聞こえとアタッチメントの点から観察すると、生後1か月では、親が子の呼吸や声にあわせて、聞き手としてかわりながら、声を真似して発声し、親のレスポンスによって、コミュニケーションが維持・発展している様子があり、すでに、ケアによって、反応しているとわかる。2か月では、自分から大人の注意を喚起するように、声の大きさやニュアンスを調整している様子があった。生後6か月ではさまざまな環境音に的確に注意を向け、また、親の声によってあやされる様子や、自分が加わっていない他者（大人）同士の話にも関心を向け、細やかな感情の変化をとらえる様子が見られた。音の存在を聞き取ることによって、聞こえる赤ちゃんでは、環境や背景に対しても、また人の表情やふるまいに対しても時々刻々とその変化をとらえ、自分に向けられた行為やことば、声の意味を全身で探り、感じているとわかる。つまり、自らに向けられたケアの行為のプロセスを大人の情動とともに感じるによって、ケアがケアとして伝わり、愛着や関係性の発達に寄与しているとわかる。

しかし、聞こえる親が難聴児を育てる場合は、ケアがケアとして伝わりにくいと考えられる。アタッチメントのパターンや養育態度の評価に SSP（Strange Situation Procedure）があり、これらの観点から難聴児を観察すると、軽度の難聴であっても、親によるケアがケアとして成立せず、養育者と響きあい、繋がるのが困難になっている場合が散見され、後の関係性の発達に留意する必要がある。聞こえと関係性（情動・愛着）は切実に関わっており、軽度難聴であっても、早期の補聴が必要であり、中高度以上の難聴の場合は補聴とともにケアコミュニケーションが必要である。ケアコミュニケーションについてはまた別の機会にお話したい。

● 特別企画「カリフォルニア州の小児聴覚学におけるチームワーク」

California State University, Los Angeles (Cal State LA)

カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校 クリニックディレクター

マーガレット ウィンター

難聴の早期発見と介入は、教育的にも、社会的にも、そして将来的に職場での成功を可能にするコミュニケーションスキルを発達させるための子供の能力に大きな影響を与えます。聴覚障害のある子供たちに包括的なケアを提供するために、複数の分野の資格のある専門家がチームとして協力し合うことによって、子供たちの成果を最大化することができます。これらの分野には、聴覚学、耳科学、言語療法、また、教育者、オーディトリバールセラピスト、そして必要に応じて、作業療法、理学療法、応用行動療法なども含まれます。

このプレゼンテーションでは、米国における新生児聴覚スクリーニング、ハビリテーション、および保護者教育のサービス提供手順とプログラムについて説明します。特に、ロサンゼルス市の優れた施設の例として、ジョントレーシー センターを紹介させていただきます。最適なコミュニケーションストラテジーとは、そのために必要なサポートとは、そして各子供にとってどれが最適なのかをどのように決定していくのか、カリフォルニアの例をとって解説します。米国の公立学校では、難聴を含む障害のある子供は、個人家族サービス計画（IFSP Individual Family Service plan）と個人教育計画（IEP Individual Educational Plan）という2つのプロセスを通じて教育支援と配慮を受ける権利を法律で与えられています。その支援や配慮として、言語療法やオーディトリバール法、ノートテイク、キャプションシステム（字幕）、および個人用または教室の補助聴取装置などが含まれます。難聴のある成人は、リハビリテーション / 職業リハビリテーション部門を通じて経済的および雇用上の支援を受けることができます。

米国で小児用人工内耳がどのように確立し、人工内耳の効果を最大限にするための

フレームワークについてもお話しします。

日本への訪問はあらゆる点において素晴らしいものでした。会社訪問、大学訪問とこのような機会を与えてくれたオーティコンと武蔵野大学の北先生と教職員の皆様にとっても感謝しています。

オーティコン本社での同僚の久木先生とのインタビューは素晴らしい経験でした。デマント・ジャパンの杉崎様には大変お世話になり、オーティコンチームの他のメンバーと出会えたことも嬉しく思います。その晩の日本食はエレガントで大変美味しかったです。

武蔵野大学でのプレゼンテーション当日は、間違いようもない訪問のハイライトでした。茶室での伝統的な昼食。箏曲部の生徒との交流も大変嬉しく思いました。彼らは音楽的な才能があり、とても魅力的でした。パフォーマンスを撮影したビデオは私の宝物となるでしょう。そして、お筆で「さくら」を弾いたことも素晴らしい体験となりました。（夫が何年前にも日本から持ってきたオルゴールのおかげで、「さくら」は私にとって意味のあるものだったので。）

カンファレンスでは、私にとって皆さんの発表はとても印象的でした。私がフォローできるように翻訳して下さり有難うございました。そして私が皆さんと共有したプレゼンテーションが興味深く、役に立ったと感想を下さり、ありがとうございました。

そして発表後、北先生と学生達が、学生のバイオリニストとピアニストの演奏とともに歌を歌ってくれ、私はたいへん感動しました。

そして昨日、新宿御苑を訪れ、望んだ通り、咲き始めの桜の木を見ることができました。親切なおもてなしと、この素晴らしい思い出に残る体験を実現するために尽力してくれたすべての方々に感謝します。

「Teamwork in Pediatric Audiology in California」

Early identification and intervention of hearing loss greatly impacts children's ability to develop communication skills that enable them to succeed educationally, socially, and in the workplace. In order to provide comprehensive care to children who are deaf and hard of hearing, highly qualified professionals from multiple disciplines can work together as a team to maximize outcomes for children. These disciplines include audiology, otology, speech language pathology, educators, auditory-verbal therapists and, as needed, occupational and/or physical therapy and/or applied behavioral therapy, as examples.

This presentation will include service provision procedures and programs for newborn hearing screening, habilitation, and parent education in the United States generally and, as an example of an excellent facility in Los Angeles, the John Tracy Center specifically. Decision-making regarding optimal communication strategies and necessary supports will be discussed. In US public schools, children with disabilities, including hearing loss, are entitled by law to have educational supports and accommodations put in place through the Individual Family Service Plan and Individual Educational Plan processes; some of these accommodations include speech language therapy, auditory verbal therapy, note-takers, caption systems, and personal or classroom assistive listening devices. Adults with hearing loss can obtain financial and employment assistance through the Department of Rehabilitation/Vocational Rehabilitation.

A framework for establishing pediatric cochlear implant candidacy and maximizing outcomes will be presented.

My visit to Japan has been splendid in every way. I am so grateful to Oticon and to

Kita Sensei and the faculty and staff at Musashino University for the opportunity to spend time here and to enjoy the pleasure of your company.

The interview with my colleague Dr. Hisagi at the Oticon headquarters was a lovely experience. I am thankful to Kimino for taking such good care of us, and I am happy to have met other members of the Oticon team. Dinner that evening was elegant and delicious.

The day of my presentation at Musashino University was certainly a highlight of my visit. I appreciate the traditional lunch in the tea house. The young ladies in the koto group were a delight; they are both musically talented and charming. The video I took of their performance is a treasure. And I loved getting to play the koto myself! As I explained, the Cherry Blossom Song is meaningful to me because of the music box my husband brought me from Japan many years ago.

I was very impressed by the student presentations. Thank you for translating their work for me so I could follow along, and thank you for letting me know that what I shared with all of you was interesting and helpful.

And after my talk, Kita Sensei and a small group of singers—together with a violinist and a pianist—sang the song for us, and you even gave me a copy of the piano music to take home. I am deeply touched. And yesterday we had the opportunity to visit the National Gardens and see some of the cherry trees beginning to bloom—just as I had hoped.

Thank you all for your gracious hospitality and for all your efforts in making this a marvelously memorable experience.

● 母校にて

今回、100周年記念を控えた年に中高大と10年間を過ごした母校に通訳として参加させていただき大変感謝しております。

前日の補聴器の大手、デマント・ジャパン オーティコンでのインタビュー収録では、難聴のお子さんの対応の仕方について目米との比較をしながら色々と考えさせられる貴重な体験をさせていただきました。

当日午前中には中高時代百人一首大会や大学時代仏教文化研究所で使った懐かしい紅雲台で、中高の拳曲部の部員さんが「千本桜」を披露してくださる感極まるものがありました。音楽家でもある Winter 先生のために、「さくら」の曲でお琴体験までさせていただきました。一生懸命教えてくれる学生さんに囲まれて60周年記念館がオープンしたばかりの中高時代を思い出していました。

シンポジウム当日はあいにくの雨とはなりましたが、私にとっては恵みの雨だったのかもしれない。中高大とかなりひどいスギ花粉症だったので、心配して雨にしてくれたのかなあと目に見えない優しさを受け取った気分にもなりました。また中高大の同級生・恩師が何人か応援に駆けつけてくれてくすぐったくもあり嬉しくもありました。

女子校・女子大が共学になり、在学時代に存在しなかった学科が出来、その中に自分

● 司会記

Margaret Winter 教授のご講演は、カリフォルニア州にある John Tracy Clinic (JTC) での活動内容をもとになされたもので、“it takes a village to raise a child.”という諺を冒頭に引用していたのが印象的であった。直訳すると、子育てには村が必要であるということだが、要するに、子どもが安心して育つ環境を整えること、多くの人々の関与が子どもの健全な育ちには重要だということを強調したかったのであろう。

難聴の早期発見、早期療育、補聴テクノロジーの活用、子どもの育ちを支援するコミュニケーションの重要性も強調しておられた。JTC は私立の難聴児通園施設で、就学前の難聴児の「聴く力」と「話す力」を伸ばすことを目標に、Audiologist や SLP (Speech language Pathologist)、保育士、教育とのリエゾン役、医師などが協働して難聴児や

● 様々な「ご縁」に支えられて

武蔵野大学大学院人間社会研究科人間学専攻言語聴覚コース / 専攻科 (言語聴覚士養成課程) 前専攻科長 小嶋 知幸

今から約10年少々前、武蔵野大学という、それまでリハビリテーションに関して特段の下地もなかった総合大学で、言語聴覚士養成課程の設置計画が動き始めるにあたっては、まさに「ご縁」としかいいようのない経緯があります。

私事になりますが、当時勤務していた仙台の大卒者対象2年課程の専門学校 (現在は3年制短期大学に改組) の卒業生の一人が、たまたま西東京地区の民間病院に言語聴覚士として入職されたことが「ご縁」の発端となりました。その卒業生は、そこで一人の失語症の方を担当することになるのですが、偶然にもその患者さんの配偶者の方が本学の関係者でいらっしゃいました。その方は、ご家族の立場から言語聴覚療法の現場に接し、「世の中にこのような素晴らしい仕事があるのか」と、感慨を新たになさったと聞き及んでおります。それが「ご縁」となり、最終的に、大学院と専攻科の2課程で言語聴覚士の養成が開始される運びとなりました。ちなみに、そのきっかけを作ってくれた仙台出身の言語聴覚士というのが、今も当コースの専任助教として貢献して下さっている嶋田 (旧姓小野) 真理子先生です。「ご縁」はさらに続きます。

当時私が監修者の一人となって刊行した失語症に関する一般向けの書籍を、件のご家族の方が手に取って下さっていて、その書籍の奥付に頼りに、私にアクセスして下さったのです。それは2012年の夏、まだ東日本大震災の記憶も生々しい時期のことでした。最初は、その方と山田英照事務局長 (当時) が、そして数日おいて、山田事務局長と田中教照学院長 (当時) が、私の狭い仕事場を直々に訪れて下さり、設置の経緯についてご説明をくださいました。正直に告白しますと、当時私は、日本において、言語聴覚士の養成課程は少々乱立し過ぎではないかという印象をもっており、今必要なことは、学校を増やすことではなく、言語聴覚士という職域が社会全体の中でもっともっと敬意を持って認知さ

カリフォルニア州立大学コミュニケーション障害学科 准教授 久木 身和子

の専門分野が出来るなんていうそんな偶然・幸運であるのだろうか、頬をつねりたくなりました。言語聴覚士養成課程の先生方と知り合って3年、密な交流をさせていただき嬉しさでいっぱいです。小児聴覚学の先駆者を招待できたという旨を伝えられた際、即答で Winter 先生、と言える環境に自分がいたことにも感謝しています。Winter 先生に講演をしていただくことが決定してから数か月、トーク内容について様々ないきさつがあり、何時間あっても足りない内容を 70 分におさめるための作業は、大変でもあり、楽しくもありました。また今回通訳という大役を任せられ不安いっぱいの中、多くの方に支えられなんとか終えることができました。通訳として至らない点もあったかと思いますがこのような機会をいただき感謝しております。自分の専門分野の通訳という作業の大変さ大切さの両方を知りい

い経験にもなりました。

常に出し惜しみなく解答してくださる Winter 先生は、今回時間切れで十分な解答をして

あげられなかった方々のことを翌日も心配しておられました。

今回の縁を機に、今後も何かしらの形で色々な相違点を知り考え意見交換を活発化させていければいいなと思っております。最後に、思わぬ縁から武蔵野40年の歴史を感じさせてもらえる貴重な機会を与えていただき本当にありがとうございました。

国際医療福祉大学大学院 保健医療学専攻言語聴覚分野 城間 将江

家族を支援しているそうである。しっかりと聴く子どもは、しっかりと考えるようになるし、話すようになるというのが長年の臨床実践から実証されていることで、難聴があっても聴覚と同様・あるいはそれ以上の学力を身につけ、社会で自立して活躍できるということを熱く語っておられた。

質問もフロアおよびチャットで受けることができ、充実した集いとなった。個人的には、難聴児に対する情熱や臨床家としての視点は共感できることが多く、言語聴覚士の魅力をも覚えています。そうと決まれば、あとは教員の布陣をどうするかということが、コース開設の成否を分ける最重要課題となります。すでに決まっていた嶋田先生はもちろんですが、加えて、私の「心の住所録」の中から厳選して、狐塚順子先生、畠山恵先生のお二人にお声をかけたこと、幸い両先生からご快諾を頂くことができました。これも「ご縁」です。

開設初年度が後半にさしかかったある秋の日、西本照真学部長 (当時) から、「学科予算が使えるから何かやりませんか」とお声かけ頂いた「ご縁」が、2015年3月の「開設一周年記念シンポジウム」の開催へとつながり、その記録は「通信第4号」に残させて頂きました。さらに4年後には、吉祥寺東急 REI ホテルで「開設5周年記念シンポジウム」も開催させていただくことができました (「通信第8号」)。このように、多くの方々との「ご縁」に支えられ、約10年前に私がほのかに抱いた希望は、一歩々々実現に向かっていっているような気がしています。

私は今年度で当コースでの任期が満了となります。新年度からは、開設メンバーである畠山助教、嶋田助教、加えて、北 義子教授・専攻科長 (2020年度着任)、上間清司講師 (2022年度着任) という新体制で、当コースはSeason2を迎えます。

どうぞ皆さまにおかれましては、永らく本学の言語聴覚士養成の理念にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

れるための何らかのアクションではないかと思っていました (自分のことは棚に上げております...)。しかし、そのような中で、私が、武蔵野大学側から設置計画の説明に強く惹かれ、コミットしてみたいと思った1番の理由は、両コースを人間科学部の上に設置するという点でした。「もしかしら、ここなら、日本ではまだ他に例のない、リベラルアーツ教育に根差した言語聴覚士の養成課程が実現するかもしれない。」と、期待に胸が膨らんだことを今でも覚えています。さらに4年後には、吉祥寺東急 REI ホテルで「開設5周年記念シンポジウム」も開催させていただくことができました (「通信第8号」)。このように、多くの方々との「ご縁」に支えられ、約10年前に私がほのかに抱いた希望は、一歩々々実現に向かっていっているような気がしています。

私は今年度で当コースでの任期が満了となります。新年度からは、開設メンバーである畠山助教、嶋田助教、加えて、北 義子教授・専攻科長 (2020年度着任)、上間清司講師 (2022年度着任) という新体制で、当コースはSeason2を迎えます。

どうぞ皆さまにおかれましては、永らく本学の言語聴覚士養成の理念にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

● 2022(令和4)年度人間科学研究所構成員一覧

	氏 名	所属等
所 長	辻 恵介	本学人間科学部長兼人間社会研究科長
運営委員	岩本 操	本学人間科学部教授
	太山 みち子	本学人間科学部教授
	小嶋 知幸	本学人間科学部教授
	五島 直樹	本学人間科学部教授
	小西 聖子	本学人間科学部教授
	藤森 和美	本学人間科学部教授
	中島 聡美	本学人間科学部教授
	渡辺 裕一	本学人間科学部教授
	渡邊 浩文	本学人間科学部教授
	泉 明宏	本学人間科学部准教授
	北 義子	本学人間科学部准教授
研究員	大崎 広行	本学人間科学部教授
	小俣 智子	本学人間科学部教授
	熊田 博喜	本学人間科学部教授
	小西 啓史	本学人間科学部教授
	中島 聡美	本学人間科学部教授
	西本 照真	本学人間科学部教授
	野口 友妃子	本学人間科学部教授
	裨田 里香	本学人間科学部教授
	藤森 和美	本学人間科学部教授
	北條 英勝	本学人間科学部教授
	城月 健太郎	本学人間科学部教授
	熊田 博喜	本学人間科学部教授
	小高 真美	本学人間科学部教授
	矢澤 美香子	本学人間科学部教授
	木下 大生	本学人間科学部教授
	日野 慧蓮	本学人間科学部准教授
	出野 美那子	本学人間科学部准教授
	櫻井 真一	本学人間科学部講師
	永野 咲	本学人間科学部講師
	浅野 敬子	本学人間科学部助教
	今野 理恵子	本学人間科学部助教
	嶋田 真理子	本学人間科学部助教
	羽毛田 幸子	本学人間科学部助教
	畠山 恵	本学人間科学部助教
	柳 延希	本学人間科学部助教
	清水 潤子	本学人間科学部助教
	岡 寿子	本学介護福祉別科教員
	小野内 智子	本学介護福祉別科教員
	松本 真一	本学介護福祉別科教員
客員研究員	橋本 修左	本学名誉教授
	北岡 和彦	本学名誉教授
	野村 信夫	本学客員教授
	孤塚 順子	本学客員教授
	堀越 勝	本学客員教授、国立精神・神経医療研究センター：認知行動療法センター長
	小松 美智子	本学客員教授
	磯貝 隆夫	本学客員教授、福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター教授
	小原 収	本学客員教授、かずさ DNA 研究所臨床オミックス解析グループグループ長
	菅野 純夫	本学客員教授、東京大学名誉教授、東京医科歯科大学・難治疾患研究所・非常勤講師
	夏目 徹	本学客員教授、産業技術総合研究所生命工学領域
	新家 一男	本学客員教授、産業技術総合研究所・創薬基盤研究部門・グループ長
	宮崎 純一	本学客員教授、大阪大学産学連携本部 特任教授
	山崎 美貴子	本学客員教授、神奈川県立保健福祉大学前学長
	山本 雅	本学客員教授、沖縄科学技術大学院大学 細胞シグナルユニット教授
	家村 俊一郎	本学客員教授、福島県立医科大学 ふくしま国際医療科学センター教授
	市山 浩二	本学客員准教授、インテグリティカルチャー株式会社 研究開発グループ
	河村 義史	本学客員准教授、バイオ産業情報化コンソーシアム JBIC 研究所特別研究員
	若松 愛	本学客員准教授、バイオ産業情報化コンソーシアム JBIC 研究所特別研究員
	熊谷 亮	本学客員教授、産業技術総合研究所・細胞分子工学研究部門・主任研究員
	福田 枝里子	本学客員准教授、産業技術総合研究所・細胞分子工学研究部門・動的創薬モダリティ研究グループ 研究員
	小林 慎	本学客員准教授、産業技術総合研究所・細胞分子工学研究部門・主任研究員
	野田 昇太	本学人間科学部人間科学科非常勤講師

武蔵野大学人間科学研究所通信 | 第12号 |

Newsletter of the Institute of Human Sciences Musashino University

企画編集・発行 / 武蔵野大学人間科学研究所 発行日 / 令和5年3月31日

世界の幸せをカタチにする。

Creating Peace & Happiness for the World



Musashino University

武蔵野大学

www.musashino-u.ac.jp

武蔵野大学 人間科学研究所

〒135-8181 東京都江東区有明 3-3-3

Tel.03-5530-7448